

第2部

新しいまちづくりを考える

第2部では、前章で述べた新市将来構想の策定手順に基づき、一般市民や有識者などの地域の様々な人々に行なった各種調査結果について分析・統合しながら検討した、新市地域全体の人々が共有すべき「地域らしさ価値」の方向性について取りまとめました。



寺泊の海岸線（寺泊町）



新市民の声を統合する

さまざまな思い、さまざまな意見を集め、 新市の「地域らしさ価値」を導くキーワードを設定しました

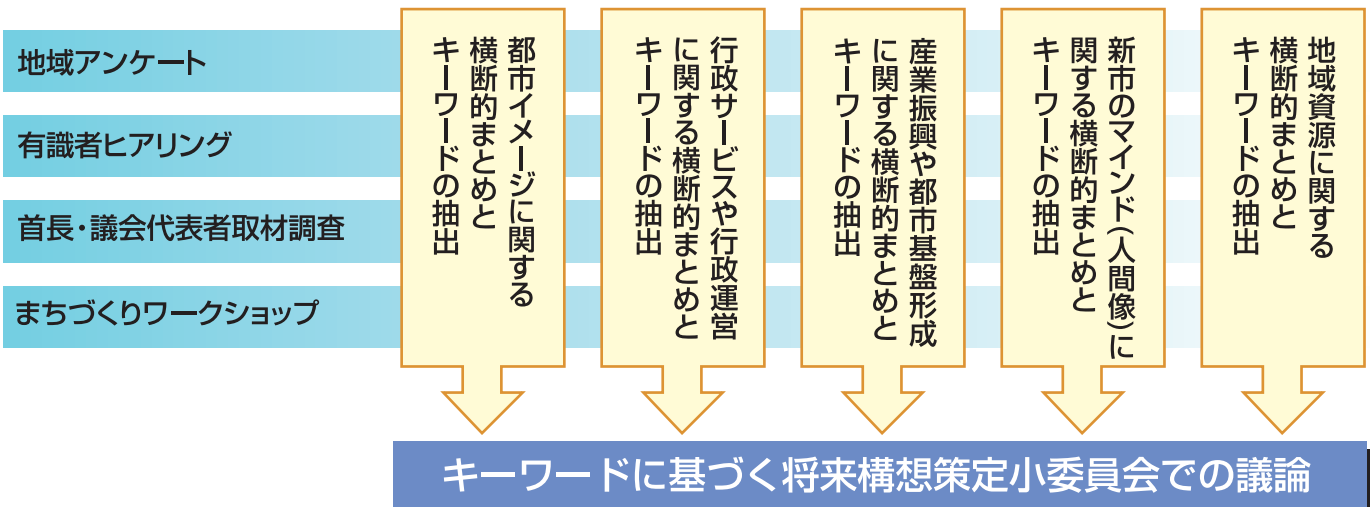
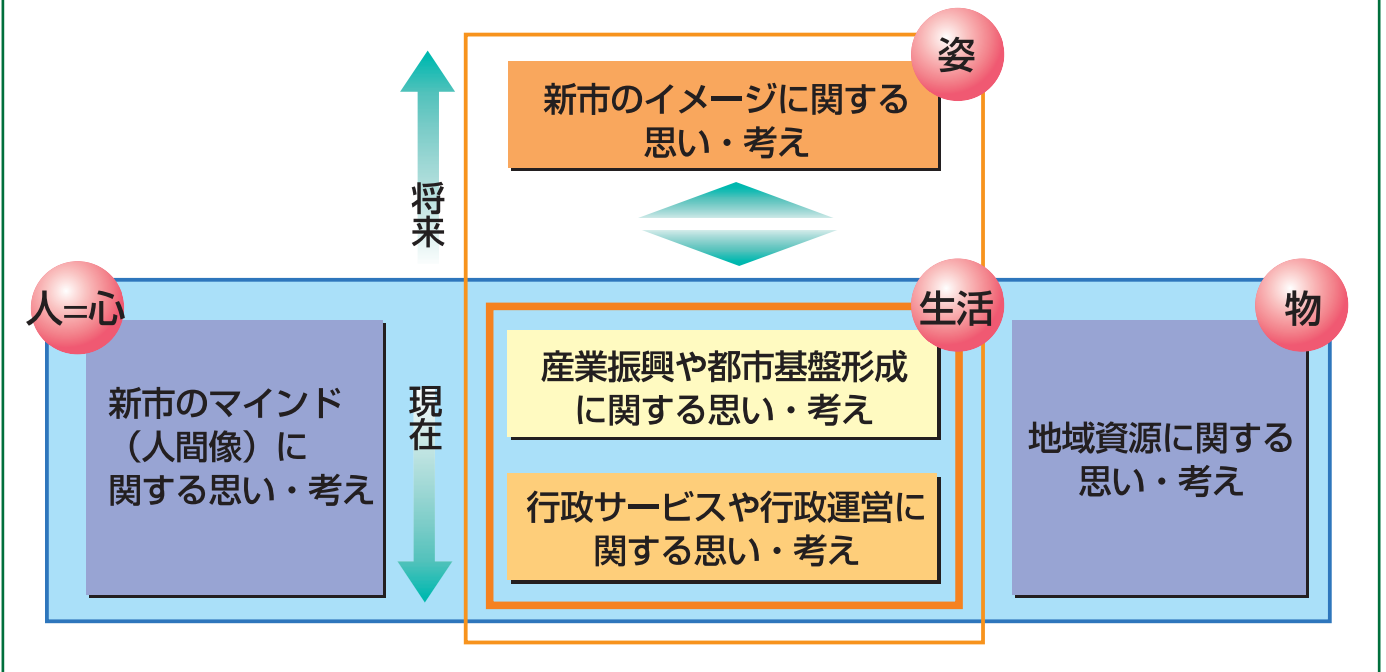
構想書の最後にお示しする、各種調査（地域アンケート調査、まちづくりワークショップ、有識者ヒアリング調査、首長・議会代表者取材調査）を実施し、各地域、各層のさまざまな思い、さまざまな意見をうかがいました。そしてそれを集約するために、まず、全ての調査などの結果を、5つの切り口から横断的にまとめ、新市の「地域らしさの価値」を考えるためのキーワードを導き出していきました。

※詳しい調査結果についてはP115～P128をご覧ください

思いをまとめる 5つの切り口

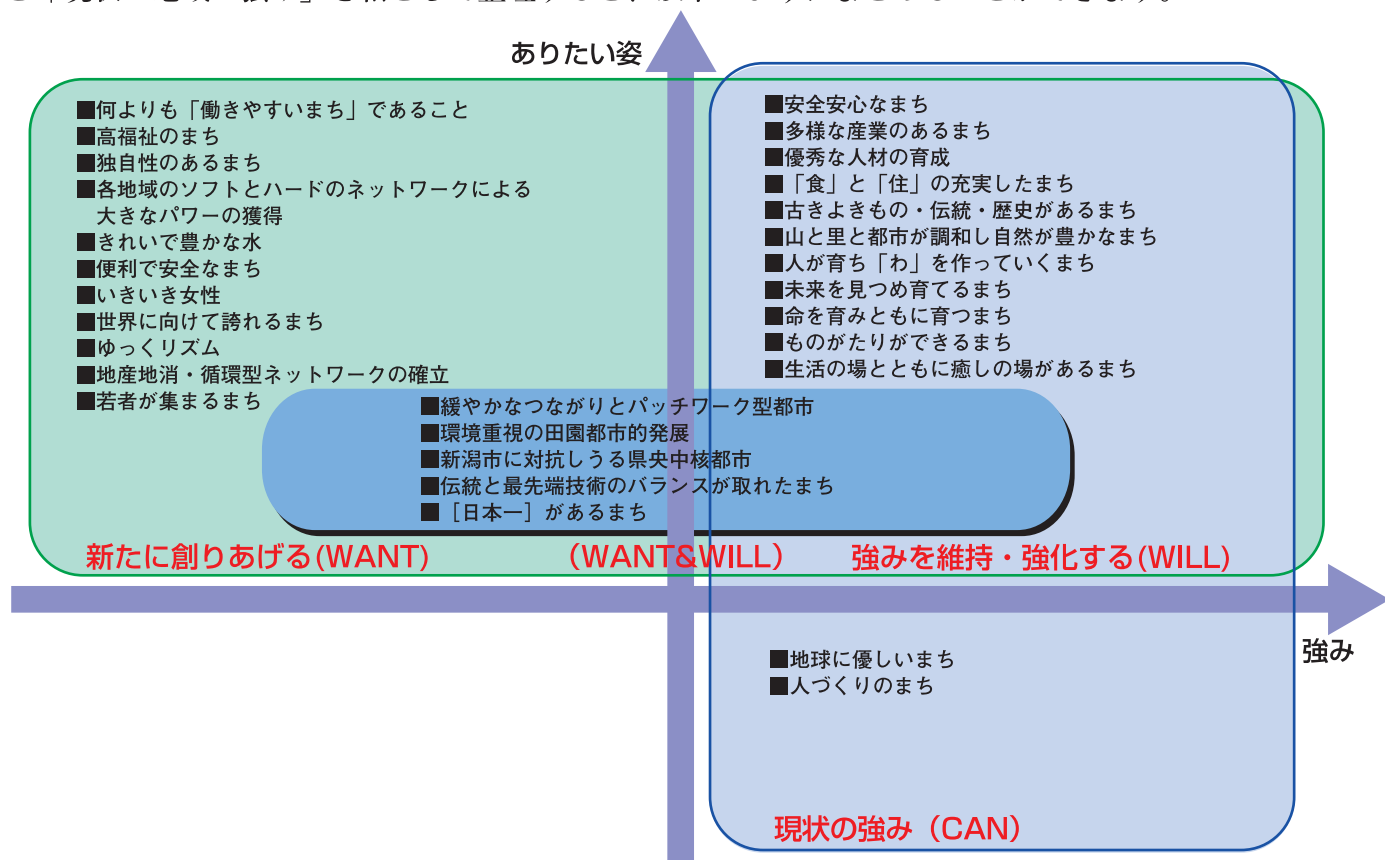
キーワードの設定については、次の2つの視点から5つの切り口を考えてみます。

- ① 将来・現在の生活・姿
- ② 現在の地域の姿としてのモノとヒト



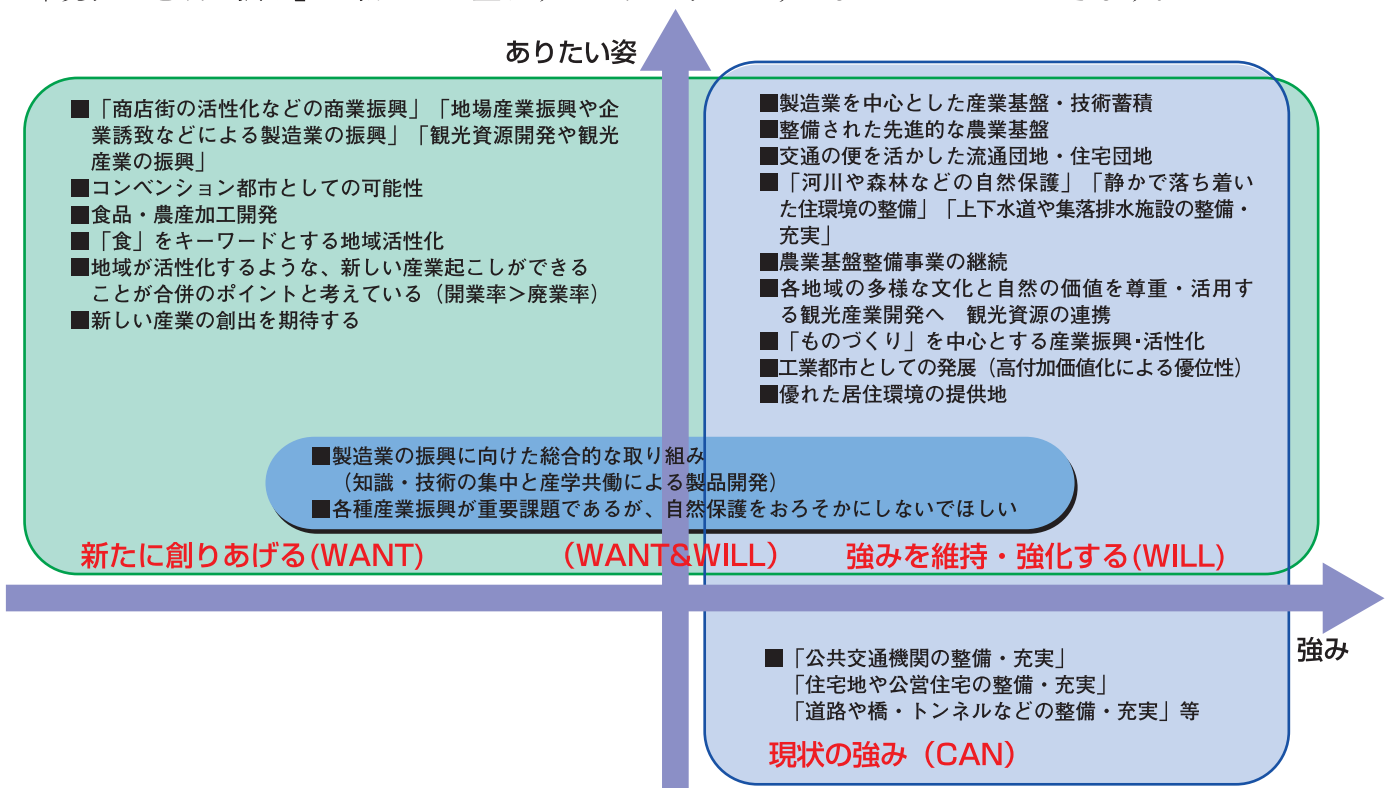
市民の声の統合（1）新市イメージについて（調査結果の抽出・分析）

各種調査やワークショップの結果から、新市のイメージに関する声を集め、それを「今後のありたい姿」と「現状の地域の強み」を軸として整理すると、以下のようにまとめることができます。



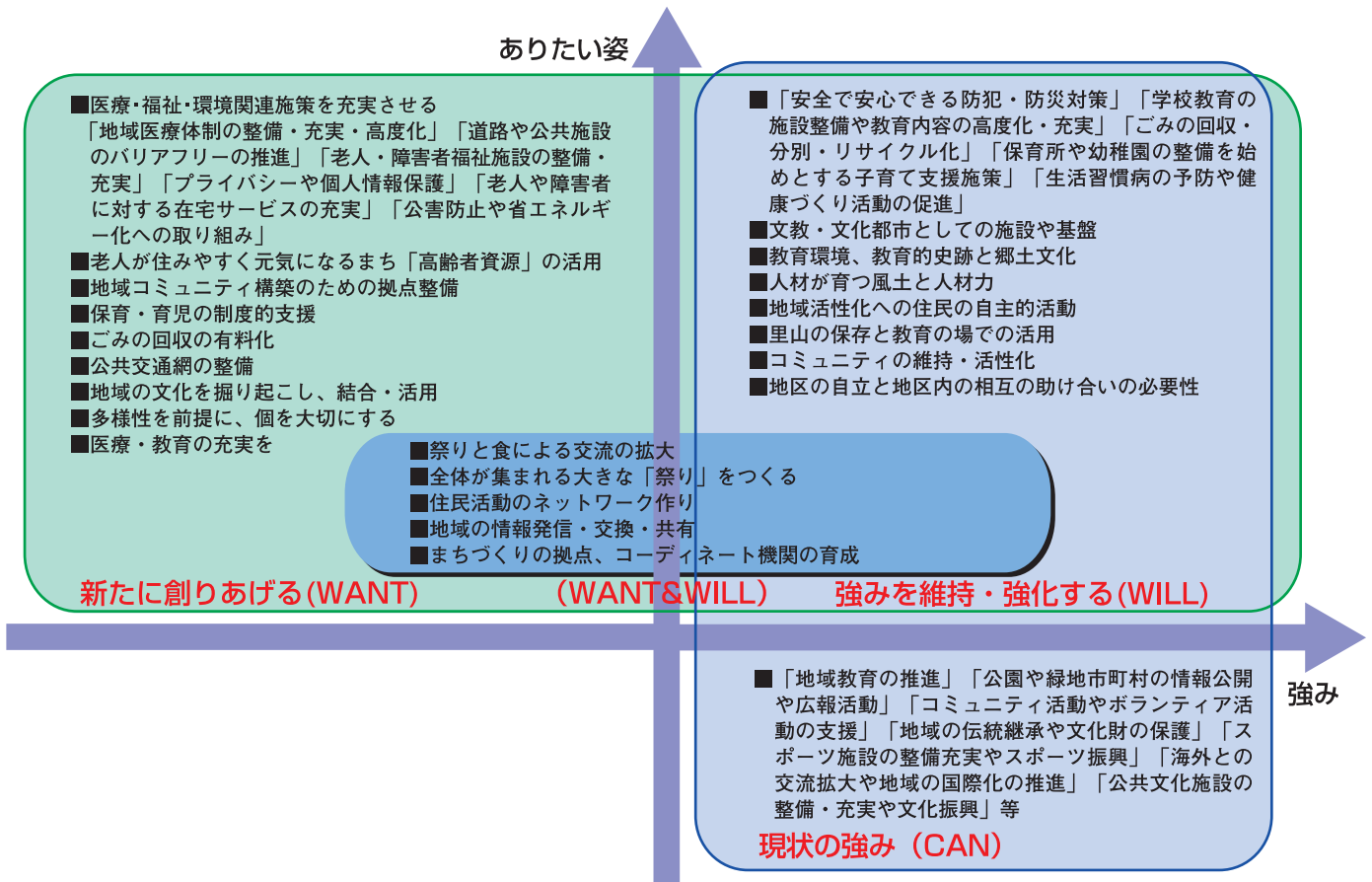
市民の声の統合（2）産業振興や都市基盤形成について（調査結果の抽出・分析）

各種調査やワークショップの結果から、産業振興や都市基盤形成に関する声を集め、「今後のありたい姿」と「現状の地域の強み」を軸として整理すると、以下のようにまとめることができます。



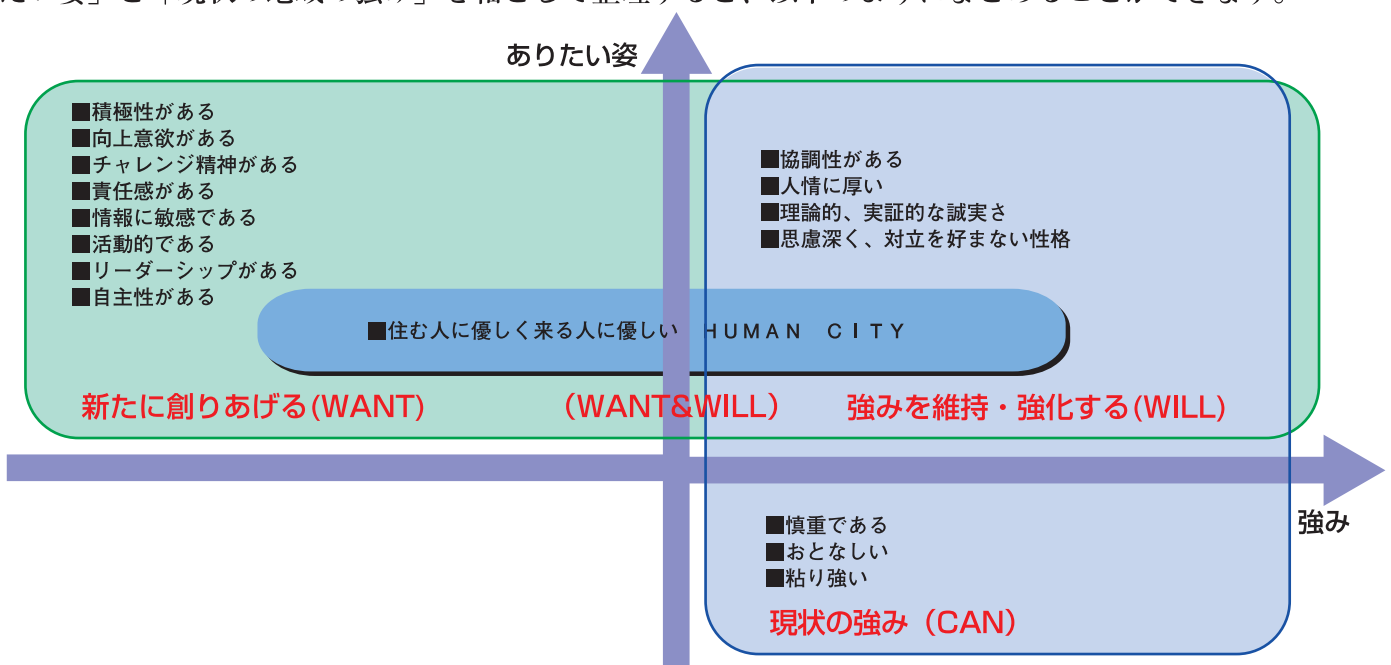
市民の声の統合 (3) 行政サービスや行政運営について (調査結果の抽出・分析)

各種調査やワークショップの結果から、行政サービスや行政運営に関する声を集め、それを「今後のありたい姿」と「現状の地域の強み」を軸として整理すると、以下のようにまとめることができます。



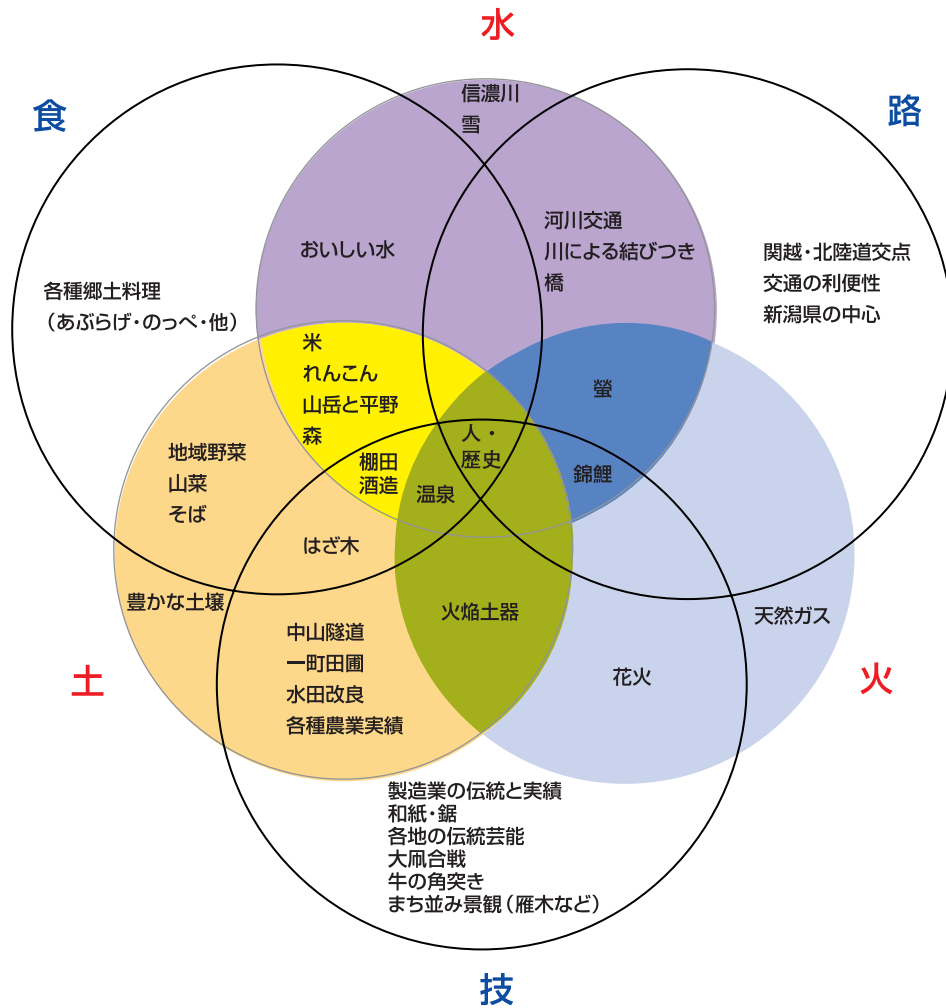
市民の声の統合 (4) 新市のマインド(人間像)について (調査結果の抽出・分析)

各種調査やワークショップの結果から、新市のマインド(人間像)に関する声を集め、それを「今後のありたい姿」と「現状の地域の強み」を軸として整理すると、以下のようにまとめることができます。



市民の声の統合 (5) 地域資源についての整理 (地域資源イメージチャート)

各種調査やワークショップの結果から、横断的に主要な地域資源を抽出し、それをイメージ的に関連するものをまとめると以下のように整理することができます。



「地域らしさ価値」策定に向けたキーワード

前頁までのまとめに基づいて、5つの切り口それぞれについて、以下のようなキーワードを導き出してきました。（地域資源については、その整理・分析に基づいて、その特徴からキーワードを導いています）



1 新市イメージに関するキーワード

1. **多様性** 多様な産業が存在（振興）していて、働きやすいまちである
2. **調和** 各地域やそこに住む人はそれぞれ個性的であり、その個性が調和している
歴史と未来が結びついている（歴史の上に未来がある）自然と人間の活動が調和している
3. **独自性** 新潟市とは違った魅力と独自性がある
4. **住みやすさ** 住民にとっては住みやすく、安全・安心なまちである
5. **その他のキーワード** ゆっくりリズム・癒し・ものがたり、など



2 産業・都市基盤に関するキーワード

1. **製造業の再生** 産業振興の中心は製造業の再生・発展
2. **食による活性化** 農業基盤整備と、「食」をキーワードとする食品・農産加工などの高付加価値化
3. **観光振興** 地域資源を活用した滞在型・参加型観光としての振興が期待されている
4. **新産業育成** 多くの人が新産業創出を期待している
5. **自然と都市の共存** 都市基盤はある程度充実しているが、自然保護や生活基盤整備を中心に現行水準の維持・強化が求められている



3 行政サービス・行政運営に関するキーワード

1. **人材育成** 教育的環境・地域の伝統や史跡を活かした教育の充実
2. **コミュニティとネットワーク** 現市町村よりも小さな単位でのコミュニティ形成とその内外のネットワーク作り
3. **地域文化保全活用** 地域の文化を保全すると共に、それを相互に結び付けてその価値を高める
4. **老若共働** 高齢者への福祉ではなく、高齢者を「地域の資源」として、老若が共働するまちづくり
5. **官民の協力** 住民自身の活動の重視。官と民の役割分担・協力



4 新市のマインド（人間像）に関するキーワード

1. **地域内で自己改革的に進めるマインド（人間像）**
●**元気さ、おおらかさ、はつらつさ** ビジョンの表現として「元気さ、おおらかさ、はつらつさ」を感じさせる言葉を使う
2. **地域外へ訴求するマインド（人間像）**
●**誠実さ、豊かさ** ビジョンの表現として「誠実さ、豊かさ」をイメージさせる言葉を使う

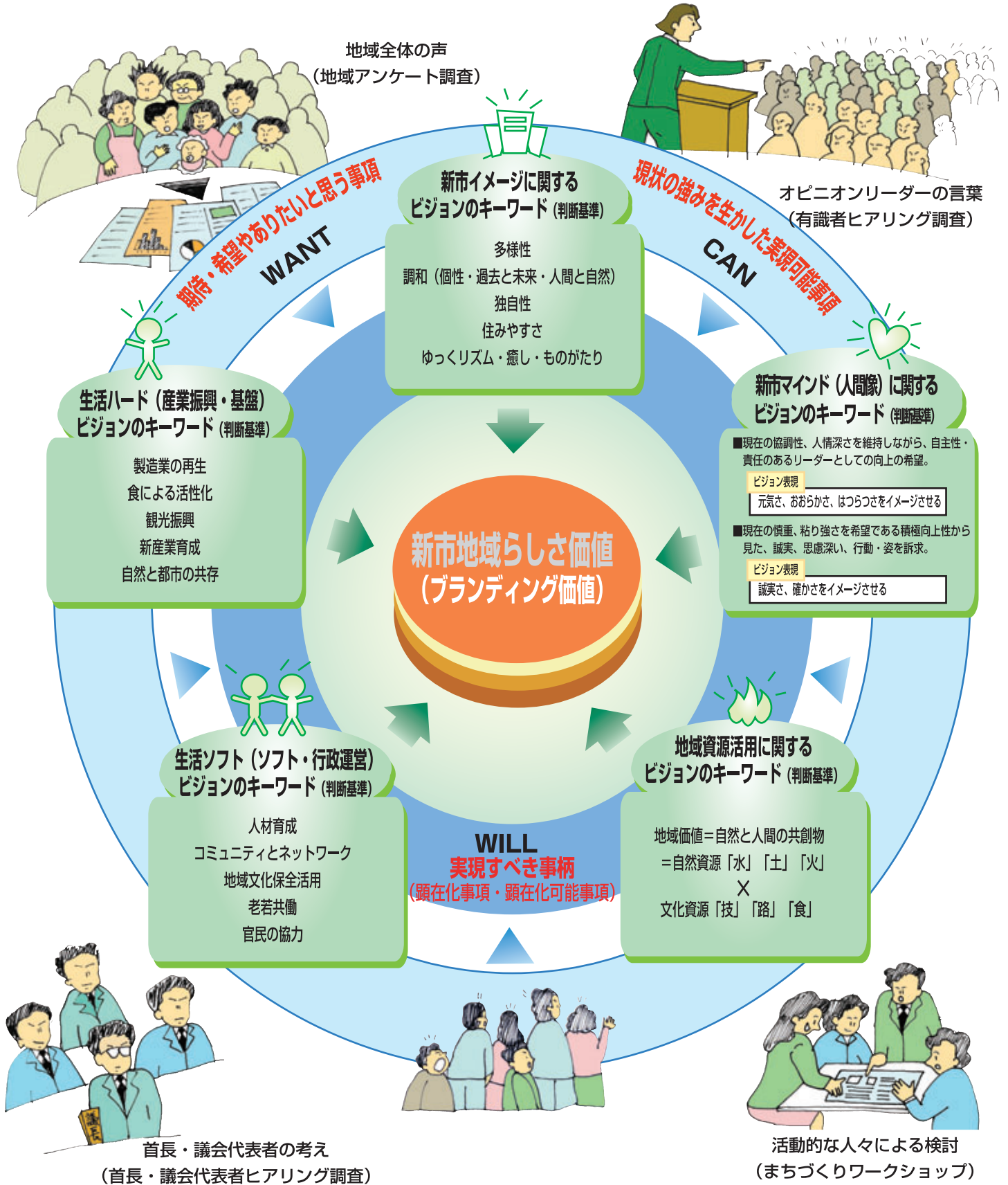


5 地域資源のキーワード

地域資源＝「自然と人間の共創物」
＝（自然資源「水」「土」「火」）×（人間の文化資源「技」「路」「食」）

これまでの検討の流れと「地域らしさ価値」の構築イメージ

このキーワードは、今回構築する「新市地域らしさ価値（ブランディング価値）」が、市民の思いや考えを満たしているかどうかを判断する基準となります。



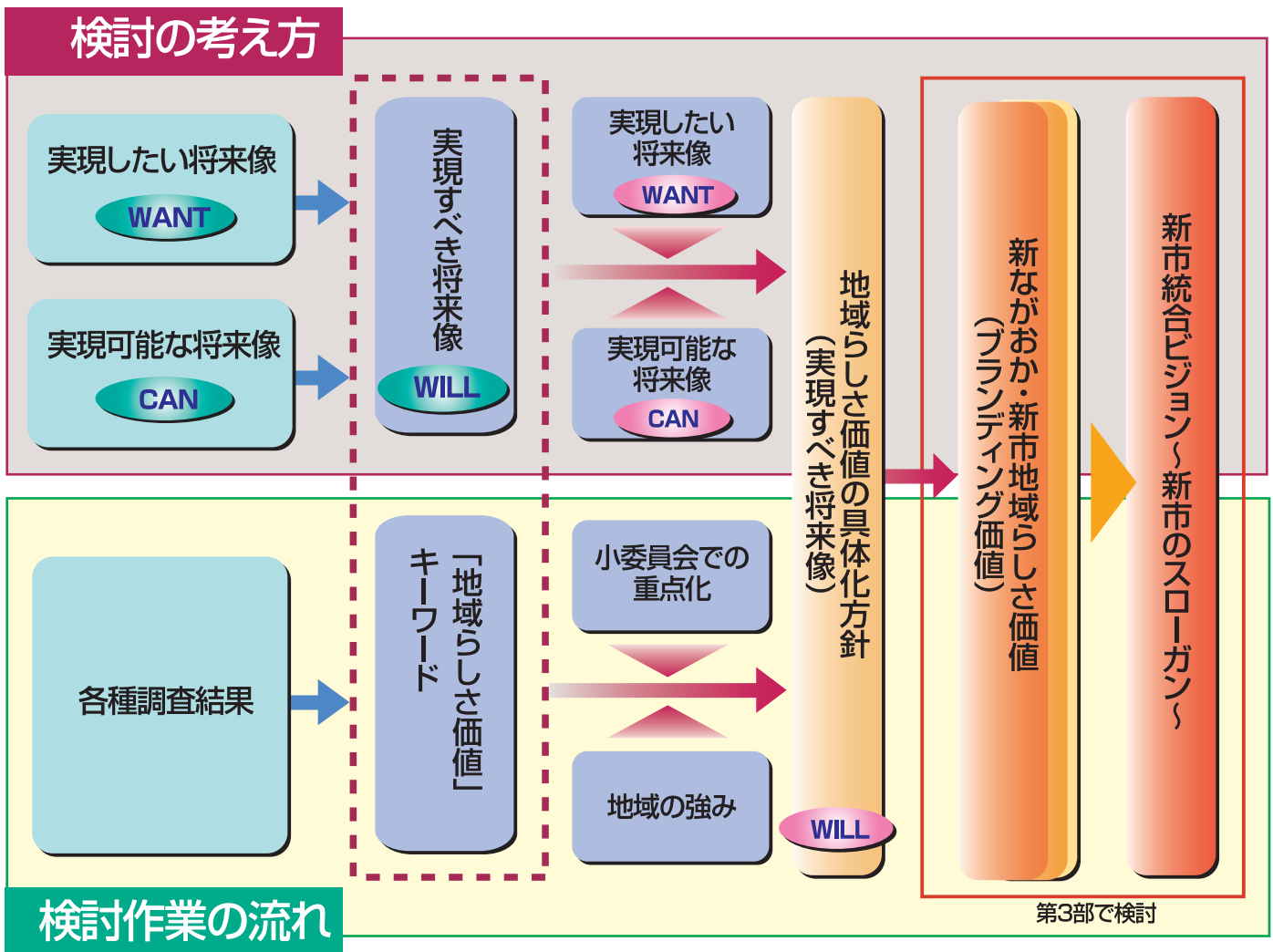


地域の強みやなりたい姿」から、「なるべき姿」を導き、「地域らしさ価値」のポイントを明らかにしました

「地域らしさ価値」の具体化方針

地域らしさ価値具体化までの流れ

新市の将来構想策定にあたっての基本方針は、できるだけ多くのみなさんの願いを盛り込み、「なりたい姿」に即して構想をまとめることです。しかし、それは根拠のない「願望」実現不可能な「夢」であってはなりません。このような視点から、将来構想策定にあたっては、「地域の強みに基づく実現可能な将来像（CAN）」と、「実現したい将来像（WANT）」を整理し、その上で、「実現すべき将来像（WILL）」を検討していきました。その流れを図示すると、以下のようになります。

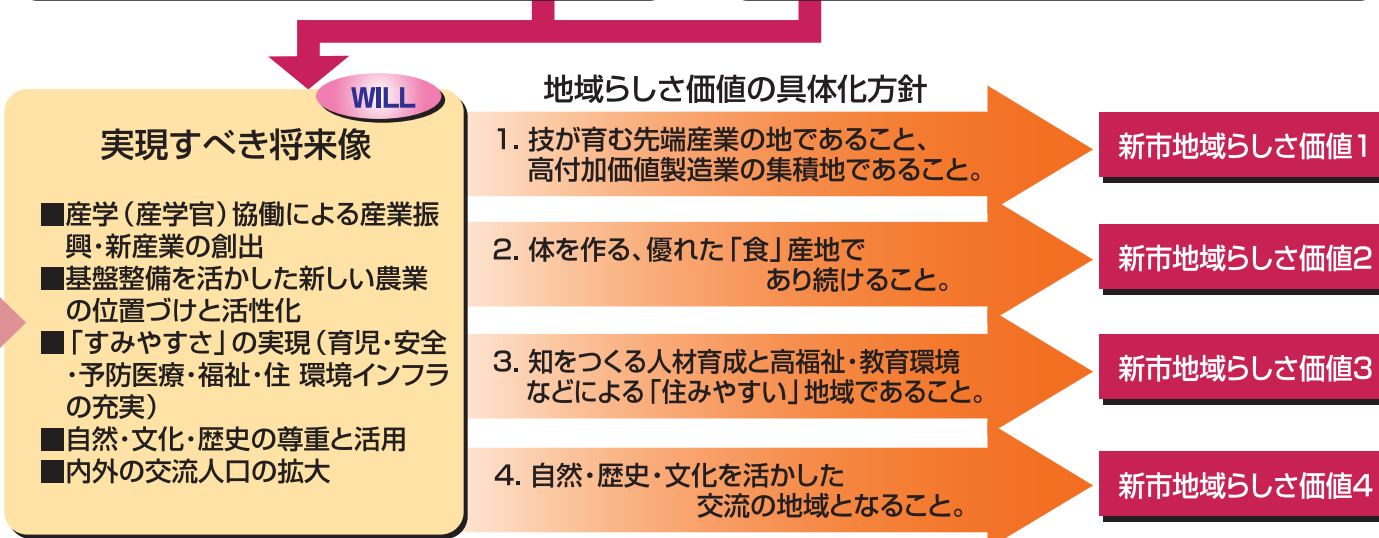
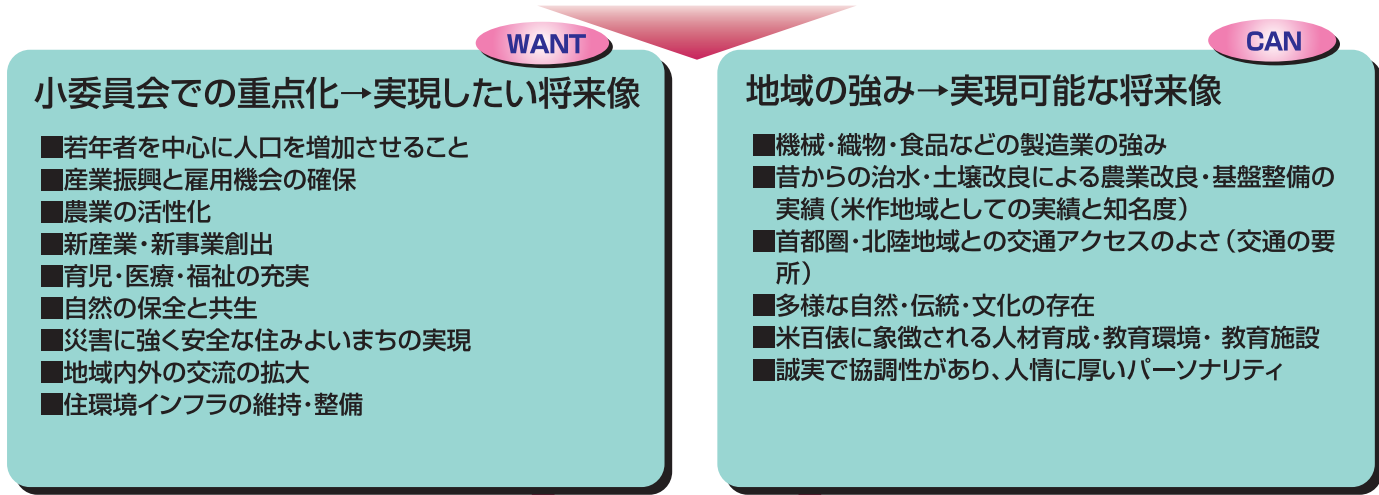
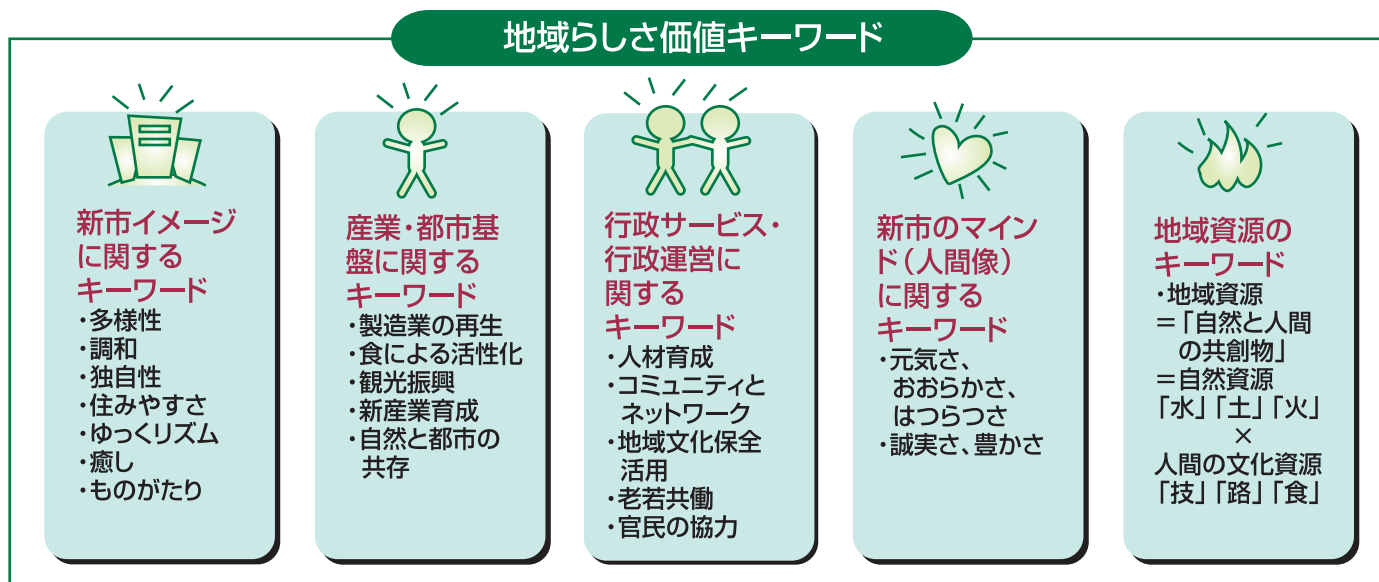


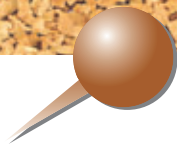
具体化の留意事項

- 右記4項目を主要な内容骨子として、「地域らしさ価値」の言語化を行います(人口増加については、右記4項目の結果として実現するものとして捉える)。
- 言語化においては、「元気さ」「はつらつさ」「誠実さ」などのイメージを加え、言葉としてのパワーを持つものとします。
- 総合計画とは異なり、行政施策全般やあり方全てに配慮するのではなく、特徴となるものを強調して長岡地域を表現するものとします。

地域らしさ価値の具体化方針

以上の事項を踏まえて、「地域らしさ価値」を以下の4項目を骨子として定めることとしました。





【長岡の大花火の歴史】

日本一の呼び名が高い長岡の大花火には、まちの歴史や人々の暮らしが反映されています。花火の歴史に、過去から次世代へとひきつがれていく地域の資産を探ってみます。

まちと花火の歴史

夜空を豪華絢爛に彩る花火は、夏の一大イベントです。県内各地の花火大会はいずれも盛大ですが、「長岡まつり大花火大会」はその筆頭でしょう。花火の迫力、大きさ、美しさは、多くの人々を魅了してきました。日本一の大河信濃川が育む恰好のロケーションで開催される大会には、2日間で延べ80万人もの観客が全国から訪れます。

長岡の花火の歴史は、江戸時代に遡ります。長岡藩10代藩主牧野忠雅のとき、川越移封の命令が中止になったのを祝って天保12年（1841）にあげたのが始まりといわれ、本格的になったのは、明治時代になってからです。明治12年の9月に、千手町八幡神社の祭礼で350発の花火が打ち上げられたのが長岡初の花火大会であり、このとき花火の費用を出したのは、長岡の花柳界と記録されています。

時が経つにつれて花火の技術は格段に向上し、大玉や仕掛け花火、水中花火も見られるようになってきました。明治の終わりには信濃川の堤防治いに「栈敷」がつくられるなど、現在の花火大会の基礎が出来上がります。

昭和初期になるころには、国内有数の大会として全国的に知られるようになり、毎年多くの見物客がやってくる盛況ぶりでした。しかし、花火は世の中が平和でなければ楽しめるものではなく、日本が戦争へと傾いていった昭和13年になると、大会はやむなく中止に追い込まれます。

長岡の花火が復活したのは、戦争が終わって間もなくの昭和22年です。昭和20年8月1日に長岡のまちを襲った大空襲でまちはことごとく焼き尽くされ、多くの被災者が出ましたが、その慰霊と、まちの復興という願いを込めて「長岡戦災復興祭」として再開されました。このお祭りは昭和26年に「長岡まつり」と改められて、同年、正三尺玉の打ち上げも再開されています。

まちの復興、経済の発展にともなって、花火大会の規模も大きくなっていきます。

昭和61年には、市制80周年を記念して誕生した新顔の花火が登場しました。市民が打ち上げ費用を賛助する、市民花火です。長岡大花火を愛する市民だけでなく、市外の人たちも参加できる仕組みになっています。

のちに「米百俵花火」と名づけられたこの花火は、市制施行年数に合わせた尺玉を、夜空のキャンパス一杯に*ワイドスクリーン方式で連続して打ち上げます。最初の年には80周年にかけて80発を打ち上げ、毎年1発ずつ増やしていった平成18年の市制100周年目には、記念すべき100発を豪快に打ち上げる予定です。

また、平成14年12月には日本初の花火シアター「まちなか花火ミュージアム」がながおか市民センター内にオープンし、平成15年8月には全国屈指の花火開催団体が集う「全国花火サミット」なども開催されました。

花火に思いを託したり、花火を通じて交流を深めていく。

花火は、人々がまちや未来に託して上げる大きな夢のひとつです。



*ワイドスクリーン方式=花火の打ち上げ場所を複数地点ならべ、約1秒間隔で10号玉が素早く打ち上がるようにする打ち上げ方式